

皆様おはようございます。いよいよ夏本番ですね。暑いお天気になって参りました。熱中症にお気をつけ頂き、お元気でお過ごしいただきたいと思います。オリンピックもついに始まり、賑やかな活気ある様子がテレビから伝わってきます。オリンピックと言いますと、いつも時差があって夜中に放送している印象ですが、これが時差なくこの国の東京で行われていると言う事に驚きます。1964年以來の57年ぶりの日本で開催されている夏のオリンピックというわけですから、成功を祈りますが、コロナの感染の勢いが爆発的に増えないようにと祈りながら見守っております。皆様方の1週間はいかがでしたでしょうか。

美しの門のところで1人の生まれつき足の不自由な人が癒され、イエス・キリストの御名による力がどれほど強いものであるのかが現わされました。

そして今日のところもその力の余波によって続いている箇所、ペテロとヨハネが説教している箇所です。ペテロとヨハネはサンヘドリンと言うユダヤの最高議会かつ裁判所で尋問を受けています。日本では国会と最高裁判所が一緒になったような、国家権力の中核のようなところに呼ばれて尋問を受けているわけです。祭司たち、神殿守衛長、議員、長老、律法学者や大祭司一族という、錚々たる人たちの前で、取り囲まれるようにして尋問を受け、彼は大胆に語りました。

4:11 この方こそ、／『あなたがた家を建てる者に捨てられたが、／隅の親石となった石』／です。

4:12 ほかのだれによっても、救いは得られません。わたしたちが救われるべき名は、天下にこの名のほか、人間には与えられていないのです。」

彼は力強くイエスキリストのことを証しして話しました。この姿を見て議員や他の者たちはペテロとヨハネの大胆な態度を見、しかも2人が無学な普通の人であることを知って驚きました。

国を挙げて集まった当代一流の学者たちや権威者たちの前でペテロとヨハネはどうしてそこまで大胆に話すことができたのでしょうか。

聖書は彼らが「イエス様と一緒にいたもの」であったと人々が分かった、そして少し納得したというようなことが書いています。

「イエス様と一緒にいた者」このことがこの人たちをここまで力強い者としたのです。彼らがイエス様と共にいて、イエス様も彼らと共にいて下さるということが彼ら無学で普通の人特別な人に変えました。彼らは当代一流の学者や政治家、為政者ではありませんでしたが、イエス様が共にいてくださり、そして聖霊が共にいてくださり、その恵みと神様の御力がペテロとヨハネをここまで強くしました。

そして今日の聖書の箇所はこのように大胆に話す2人を一体どうするかということ協議する場面です。

最高議会のその錚々たる人たちは2人に議場を去るように命じてから相談していました。あの者達をどうしたら良いだろう。彼らが行った「目覚ましいしるし」はエルサレムに住むすべての人に知れ渡っており、それを否定することができない。しかしこのことがこれ以上に民衆の間に広まらないように今後あの名によって誰にも話すなと脅しておこう。この最高議会の人たちは権威を持っている人たちでした。しかし彼らはこう考えました。ペテロが行った目覚ましい印はエルサレムに住むすべての人に知れ渡っているからそれを否定することができない。しかしこのことがこれ以上民衆の間で広まっては大変だ。このことがこれ以上民衆の間に広まっては大変都合が悪い。人々にこのイエス・キリストの御名を教えたくない。知らせたくない。もし彼らが知れば人々が自分の指導の力の及ばないところに行ってしまう。人々を自分たちは彼らに対してどうにもすることができなくなってしまうから、このことだけは止めなければならないと、そのように考えました。

神様の大きな働きが始まっているかもしれないのに、彼らは自分の対面や、自分の立場や権威、自分の地位を守ることしか考えていませんでした。しかし彼らは自分たちに権威があると考えながらも、人を恐れていました。自分たちに都合の良いことばかりを考えて、何とか民衆を抱き込んで、いつまでも自分たちの立場を守りたい。ですから彼らは民衆を恐れていました。ふんぞり返って偉そうにしているけど、結局民衆の顔色を窺い恐れていました。

結局のところ彼らは自分が特別だ、民衆のように無学で普通の人ではない、我々は学問があつて特別だと思いつつも、民衆の顔色をうかがう、民衆の力をどうすることもできない無力である存在であるということを彼は知っていました。その民衆に対して、「イエスの御名」によって不思議な業をなし、すっかりとその心を奪ってしまったペテロらのことも、彼らは恐れていたに違いありません。

そこに起こっているのは人の力ではなくて他ならぬ神様の素晴らしい御業なのだというのが彼ら指導者たちの心の中になかったわけはありません。しかし彼らの決定的な欠陥は、自分のプライドの強いあまりに、それを認めたら自分たちがイエス様を十字架にかけたことの誤りを皆認めなければならないことから、民衆たちのように心素直に心を開いて神様を求めて神様を見上げて神様を賛美すると言う事できなかったのです。これは民の指導者としても、いや一信仰者としても決してあつてはならないことでしたが、彼らは自分たちの権威で臭いものにふたをして逃げおおせるものと思いつ込んでいました。

彼らは徹底的に自分の力に頼み、自分たちが正しいと盲信しきって、自分の敵となるものは神の子でさえ葬り去るといふ、人の罪の最たることをしでかしてしまいました。そしてイエスキリストにこれ以上自分たちを掻き回されるのはごめんだと開き直り、イエス様を葬りその残党を狩るといふ、神様を畏れない行動に突っ走っていました。

本当のところ、彼らは力ある権力者ではなく、民の宗教的指導者ではなく、彼らは自分の罪に薄々気づきながらも、自分の罪を悔い改めることもできないかわいそうな弱い集団に成り下がっていました。そして姑息な手段取り、今後あの何よって誰にも話すなと脅しておこう、彼らを権威の力で、たっぷりと脅しておいて、言うことを聞かせよう、恐怖に陥れて彼らを従わせようとするように考えました。

4:18 そして、二人を呼び戻し、決してイエスの名によって話したり、教えたりしないようにと命令した。

この「命令した」という言葉が虚しく響きます。15節にも「そこで、二人に議場を去るように命じて」というのがありますがけれども、権威者である彼らの命令は、権限は絶大だと彼らは自分たちが作り上げた仕組みの中にふんぞり返って思っていたのですけれども、この彼らの命令ほど虚しいものはありませんでした。神様の形に従わない人間の形にどれだけの力があるのでしょうか。

この先、使徒言行録の19章に出て来るお話なのですが、それはユダヤ人の祭司長スケワという人の7人の子どもたちのお話です。

19:11 神は、パウロの手を通して目覚ましい奇跡を行われた。

19:12 彼が身に着けていた手ぬぐいや前掛けを持って行って病人に当てると、病気はいやされ、悪霊どもも出て行くほどであった。

19:13 ところが、各地を巡り歩くユダヤ人の祈禱師たちの中にも、悪霊どもに取りつかれている人々に向かい、試みに、主イエスの名を唱えて、「パウロが宣べ伝えているイエスによって、お前たちに命じる」と言う者があった。

19:14 ユダヤ人の祭司長スケワという者の七人の息子たちがこんなことをしていた。

19:15 悪霊は彼らに言い返した。「イエスのことは知っている。パウロのこともよく知っている。だが、いったいお前たちは何者だ。」

19:16 そして、悪霊に取りつかれている男が、この祈禱師たちに飛びかかって押さえつけ、ひどい目に遭わせたので、彼らは裸にされ、傷つけられて、その家から逃げ出した。

笑い話のような、それでいて、悪魔はよく人を見ているという少しぎょっとするようなお話です。私たちがイエス様の御名によって語ったのならば、悪魔はどう反応するだろうかと、心探られるような気がいたします。それはそれとして、イエス様の御名を語るということは、本当に、語る人の覚悟と信仰が試されることであるということを知られます。祭司たちも、民衆を恐れ、そんな弱腰で、神様の遣わされた御子を見る目もなく、悔い改める心もなく、どうやって祭司長、律法学者たり得たのかがはなはだ疑問です。

4:19 しかし、ペトロとヨハネは答えた。「神に従わないであなたがたに従うことが、神の前に正しいかどうか、考えてください。

4:20 わたしたちは、見たことや聞いたことを話さないではいられないのです。」

彼らは権威を目の前にその命令を目の前にしても、恐れることもひるむこともありませんでした。人に従うことが正しいことか、それが正しい人たちならばまだしも、いたずらに民衆を恐れるだけの虚しい指導者たちに従い、イエス様の御名を知らせることをやめるなど、彼らには考えられないことでした。

それは神に従わないことなんだ。神様の標準、神様の御心、神様の御存在や有り様、み旨に照らし合わせた上で、それらを拒絶してまでどうして人に従わなければならないのかとペテロは語りました。

私たちが見たことや聞いたことがあまりに素晴らしいことでイエス様のお働きによって実際どれほど多くの人に大きな影響を与え、癒しを与え、給食し、教え、励まし、他の人の人生をどれだけ変え、悔い改めに導いたのか、そういう素晴らしいことを見たり聞いたりしてきたその弟子としての彼の人生がありました。そしてそのイエス様のお名前によってもたらされた神様の救いの力を、主の御名によってあらわすことを託されている自分たちが、どうして人を恐れて神を畏れずして、その大切な務めを手放すのか、ペテロは力強く語ります。むしろペテロは指導者たちに向かって、あなたたちは逆になんで私たちに神様が遣わされたイエスキリストを伝えることを、どうしてあなたたちは何の権威によって私たちにそれを話さないように命じるのか、神様が語れと言っておられるのにどうしてあなた方は何の権威で私たちにそんなこと言うのか不思議でしょうがないということを彼らは堂々と権威者の前で語ったわけです。これは私たちの当然抱く疑問です。私たちはそういう力強い者をお預かりしているのですが、それはお預かりする私たちの覚悟と信仰をも必要とするものなのです。

4:21 議員や他の者たちは、二人を更に脅してから釈放した。皆の者がこの出来事について神を賛美していたので、民衆を恐れて、どう処罰してよいか分からなかったからである。

このように神が賛美している状況で、人々の前でパウロらを処罰したならばいよいよ自分たちの権威自体が脅かされる。権威者たちは相も変わらず自分たちの立場を守る事だけに一生懸命でした。なんとという哀れな存在なのでしょう。彼らは切羽詰まっていた。しかしここにある問題は、それでもなお彼らが神様の前に悔い改めて出ることをしなかったということなのです。彼らは本当にむなしい弱々しい、人間を恐れ、神様を畏れない人たちでした。

4:22 このしるしによっていやしていただいた人は、四十歳を過ぎていた。とあります。

40年を過ぎるまで誰も施し以外何もできなかったその人を、神様は立たせてくださいました。この人はイエスキリストの名によって40年以上の時を越えて生まれつき足が不自由であったこの人は、人の力ではなくて、ただイエス・キリストの御名によって、その御名からもたらされる力強いその働きによって、ついに立ち上がられました。なんと感動的なことでしょうか。なんとはつきりと、私たちがよって立つべき、畏れるべきものが何かと言表されています。人を恐れることよりも神を恐れるべきです。

このような力強い大きな御力を持った方こそ私たちは恐れ、そしてこのお方を聞き従い、並々ならぬ信仰を持つ手この御名に生き、この御名を伝え、苦しみにとらわれている方々の救いになりたいと、心から願うのです。